

しいのき



お花見は花占い

名誉館長 三 隅 治 雄

桜の蕾がふくらむ。ああ、春だなと胸もふくらみます。その蕾が一分咲き、三分咲き、五分咲き…とだんだんに開いて、さあ、お花見だと、みんなが浮かれ出る。その花見には、なぜか酒・肴が付き物です。おおぜいが誘い合って、花より団子の感じで、桜樹の下にご馳走を並べて飲めや歌えやの大宴会。酔っ払っての踊り風景が毎度見られます。同じ花でも、バラや菊なら静かに鑑賞するのに、どうして桜に限ってドンチャン騒ぎするの？と問われそうですが、それは、桜を、稲のシンボルと見る民俗があったためです。

サは稲の霊の意。クラはその霊のやどる蔵・座の意味で、その稲霊に、元気に成長していっぱい実を稔らせてくださいとお祈りする。そのお祈りのお祭りが花見の宴なのです。そして、花の咲具合で稲の出来栄を占って、満開が長く続くと今年は豊作、散り方が早いと不作と判断したのです。散る花に心をいためる日本人の感性の底には、稲の豊凶を占う心情が働いていたのです。「見る」は「占う」ことでした。

文化財よもやま話

新世紀と蛇と日本人

21世紀、「辛巳」で幕開けです。

「ミ」は、経心=身を経て進む、蝮などを語源とする蛇が干支の動物として当てられています。くねくねとうねり、舌をちょろちょろと出す蛇は、気味悪がられながらも、古今東西において語り継がれ書き記されてきました。須佐之男命に退治された八俣大蛇や、蛇と人間の結婚、水辺の主の蛇の物語などを、一度ならずとも聞いたことがあるという方も多いでしょう。また芸能舞台の世界では、「道成寺」のように女が情念で蛇に化すという内容も演じられています。

信仰においては、タタル存在として恐れられる一方で、神や神の使いとしても崇拝されています。中野でも白蛇が祀られていたり、福寿院(本町3)には、井の頭公園内にある老翁弁財天の孫娘として、人頭蛇身の石仏が見られます。

水神としての性格も持つ弁財天と縁の強い蛇ですが、古代日本人の信仰対象であった大和・三輪山の主が蛇とされるように、山の神としても崇拝されてきました。農耕にも深い関わりが窺え、竜と同格に見なされることから、しばしば雨乞いに登場したり、害獣の鼠を退治してくれる存在として養蚕農家でも重宝されています。また、藁蛇・注連縄・綱引き・鏡餅などの年中行事や祭礼だけでなく、信仰縁起物や郷土玩具においても、蛇をかたどるものは多く見られます。

衣替えの旧六月朔日は、脱皮をする蛇にちなみ「剥けの節供」と呼ばれます。蛇の抜け殻は金運をもたらすそうです。同じ日に富士山開きがあり、精進潔斎に登山をしたり、浅間神を勧請した富士



塚の巡拝が行われ、疫病除けに売られた麦藁蛇が名物でした。

五穀豊饒・招福除災を祈る蛇にあやかり、素晴らしい新世紀を願いたいものです。

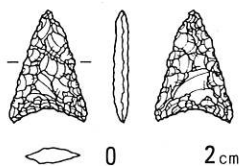
◁「うなぬの友」
「江戸駒込富士神社にて纏ぐ大蛇」
「江戸浅草富士神社産大蛇」

大地に眠る歴史

昔の人は遺跡をどう見たか(4)

今回は、縄文時代に盛んに用いられた石の矢じりである「石鏃」について、昔の人の見方を確認してみましょう。

今を去ること1162年前の承和6年(839)に、国司から朝廷に不思議な石が沢山送られてきました。報告によれば、出羽国田川郡の西浜(山形県飽海郡遊佐町の海岸といわれる)に雷雨の後、沢山の石が空から降ってきたとのことでした。この年は天災が多く、朝廷では不吉なことの起こる前兆と考え、異変にそなえて陸奥・出羽・大宰府で神仏に祈りを捧げました。この不思議な石は、白・黒・青・赤などの色をした矛先に似た形をしたものと伝えられています。その後も884年・885年・886年の三回にわたって同じ地域で同様な事件が起っています。



石 鏃

この石の正体は何か? 現在では「石鏃」と判断されています。発見地の近くにあった縄文時代の遺跡から、長雨にうたれて地表面に姿を見せた遺物を、当時の人々が空から降ってきたものと理解したのでしょうか。さまざまな色合いがあるのは、黒耀石や赤色頁岩・珪岩といった石材を用いていたからと思われま

す。このように、当時は原始時代の石器を人工物とは考えず、神話に出てくる神の軍や雷神・天狗が落としていった天工物と考え畏怖していたことがわかります。

このような考え方は意外にも長く続いており、「石鏃」が人の作ったものであると判断したのはそれから約800年後の江戸時代です。国史研究所でもあり有数な政治家でもあった新井白石は「白石書簡」の中で、古代人の製作したものと判断しています。さらに白石は、西暦544年に佐渡ヶ島に漂着した、古代北方民族の肅慎人の武器であると解釈していますが、残念ながら、これは間違いです。さすがの白石もまだ縄文時代の存在までは思いもよらなかったようです。(つづく)

企画展関連特集

いろいろあった この100年

21世紀です。昨年の新千年紀に続いて今年は新世紀にはいりました。きたる百年・千年はどのようなのか想像をめぐらせるのは楽しいことですね。そしてその想像を単なる空想にさせないためには、人間と社会のこれまでの歩みを知り、これに基いて先のことを考える必要があります。

7月3日から12月2日まで、皆様より小館へご寄贈いただいた資料のなかから20世紀の間に刊行された図書・雑誌・新聞など刊行物で20世紀をふりかえる企画展「うきしずみ 20世紀」を開催いたします。これは公的性格をもつ刊行物により、当時の知識や思想のあり方を考えるものです。

今回はその関連特集として、展示します資料のいくつかをみていきましょう。

第1セクション：20世紀のあけぼの ～ 大正の終焉

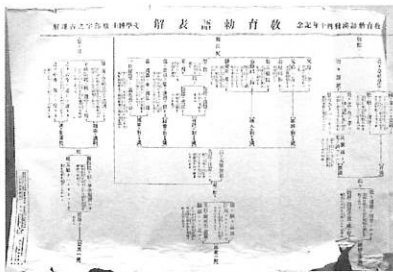


←ちょうど百年前の1901(明治34)年出版『小学校英語読本』です。ローマ字から始めて発音の練習、ローマ字と英語の対訳という構成となっています。著者の神田乃武は一時期中野に住んでいました。

→宮武外骨著『震災画報』という関東大震災後の状況を扱った冊子です。宮武は反骨精神と諧謔趣味が真骨頂なのですが、場合が場合だけにこれは極めて真面目なものです。



←教育勅語40周年記念に出された勅語の構造と語句に関する解説です。そのまま読むとなかなか理解しづらいものなのですが、文を細かく分けてそれぞれに口語訳をつけ、全体の構造ごとに分割して配列するという工夫を凝らしています。戦前・戦中に学校時代を送った世代には教育勅語を暗誦できる方もいますが、丸暗記だけでなく内容の理解にも意をくだしていました。



まずは1901(明治34)～25(大正14)年、20世紀の始まりです。日清戦争の勝利で大いに自信をもった反面、三国干渉によって譲歩させられた怨みも大きなものでした。日露戦争はそうした空気を振り払うものと意識されましたが、国内の思いこみとは別に開戦1年後の国力は底をつけていました。大衆の主流は政府が主唱する大陸経営に肯定的でしたが、一部に反対する人々もいたので政府は取締りを強化していきます。そうした動きと並行して韓国内での影響力を強化、日露戦争で得た権利を足がかりに大陸へ力を伸ばしました。大正時代はデモクラシーを一方の力とする国内政治の混乱で幕を開けましたが、1914年の第一次世界大戦勃発は人々の耳目を外に向けるとともに、大戦景気といわれる好況をもたらしました。大戦が欧州を主戦場としたため欧米の主力がアジアから離れると、日本政府はこの機を逃さず中国に圧力をかけて利権を拡充します。朝鮮・中国で反日運動が起りますがこれを鎮圧、既得権を推進していきました。ドイツに戦線を布告していたため大戦で戦勝国となった日本は国際連盟に発足当初から参加し、国際的な立場はよりいっそう有利なものとなりました。しかし戦後不景気と世界的恐慌の影響が重なって不況が深刻化します。国際的に平和志向が高まったことにくわえ緊縮財政のため海軍の軍縮を行いました。軍部は反発、政治が混乱するなか関東大震災が起りました。不穏な状況に対し治安維持法と普通選挙法のアメとムチを使いだした頃、大正は終わります。

第2セクション：昭和の始まり ～ 戦争前夜

→江古田土地区画整理組合の事業報告です。この頃、中野区内でも区画整理が進みました。区画整理によって現在の町の原型ができあがっていきますが、その一方で古い道や川の姿が消えていきます。



↑満洲国の帝政移行の報道です。「極東平和の固め」「国民的念願遂す」とあります。なお、当時は「満洲」と表記しました。

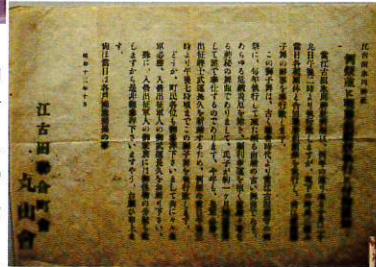


→図解入りの料理入門雑誌付録です。この時期からこういったものがありました。

日中戦争と第二次世界大戦を分けるのが一般的ですが、ここでは盧溝橋事件に始まりポツダム宣言受諾に終る一連の戦争とします。東アジアに新たな秩序を樹立するという計画の一方でそれに沿わない見解の弾圧が強化されていき、国家総動員法に結実しました。そうしたなか、ドイツのポーランド侵攻に始る第二次世界大戦が勃発、日本は翌年東南アジア方面へ戦線を拡大するとともに日独伊三国軍事同盟を締結して戦争体制を強化しました。政党など全ての政治団体を吸収するかたちで発足した大政翼賛会とその運動は、人々の意識と行動を強力に編成していきました。並行して、国益のぶつかりあいにより険悪だった日米関係はさらにこじれていき、ついに真珠湾奇襲攻撃という事態をむかえました。当初は軍上層部の見込どおり破竹の勢いで影響圏を拡大しましたが、皮肉なことにこれも予想通り時間の経過とともに戦局は悪化しつづけ、開戦の翌年にはすでに下り坂にはなっていました。南方での敗退は大陸からの戦力引抜きを招き、北部戦線でもジリ貧になっていきます。ついに沖縄などの死闘と本土爆撃・被爆、そして敗戦をむかえました。

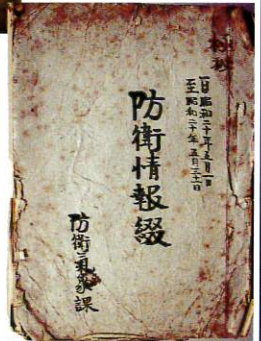
1926(昭和元)～36(同11)年を扱います。昭和の初期、左派運動がかつてなく盛り上がり、政府は運動を弾圧するとともに大陸への出兵で大衆の目を逸らしていきますが、金融恐慌のもたらした閉塞感まではどうしようもありませんでした。追打ちをかけるように世界恐慌の波及による大不況に襲われます。この不況は農村部において特に深刻で没落する農家が激増、土地の集積が進むとともに零細小作農も多くなりました。この事態を憂いて、軍部の若手将校を中心とした政治刷新を求めるグループができ、勢力と影響力を増していきます。政治の刷新と変革を求める声は軍内部だけでなく社会の色々な層に広まりますが、政党に左右されない軍部を主軸とする強力な内閣を求め、国家の主権を拡充しようという意見が盛んになりました。そうしたなか、かねて緊張が高まっていた大陸で南満洲鉄道線路の爆破をきっかけに駐留日本軍が軍事行動を開始、政府の不拡大方針にも関わらず戦線は拡大し、満洲国建国に至ります。この件に関して国際的非難にさらされたため、国際連盟の脱退という道を選びました。その後、条約などの国際関係を断絶し孤立するなか、2・26事件を大きな契機として軍閥支配が進展しました。

第3セクション：日中戦争～敗戦



←氷川神社で恒例のお祭だけでなく戦勝祈願を行うという通知。文面もこの当時特有の仰々しいものです。

→戦争末期の『防衛情報綴』。空襲警報や解除の情報を載せます。右上に「極秘」と朱書きしてあります。



←1945年3月の下町大空襲とあわせて東京を焼払った5月の山手大空襲による罹災証明書です。この空襲により中野区にも大きな被害がでました。「練粉乳又ハ牛乳用砂糖購入票」を兼用し、多数の記入があります。

第4セクション：焼け野原 ～ 復興

1946(昭和21)～63(同38)年です。占領体制の開始とともに矢継早の改革が始り、それまでの価値観が崩壊して混乱もひきおこします。人々はこれまでとこれからを考えましたが、荒廃した社会のなかでは生きるだけで精一杯の人も数多くいました。憲法や諸法令の改定・経済集中の解除・国際関係の再構築といった改変は米ソ対立が激化する影響をうけ、当初のものから大きく変化します。戦争により荒廃した日本が経済的に立ち直るきっかけが朝鮮戦争の特需であったというのは皮肉なものです。サンフランシスコ平和条約締結により国際法上の戦争状態はようやく終わりましたが、同時に結んだ日米安全保障条約はその後に大きな影響を及ぼします。1960年代以降は世界的にも経済成長期でしたが、日本の成長率は突出しており、世界第2位の経済大国になりました。しかしながら後回しにされた分野にしわ寄せがいき、公害など社会問題が増加します。また、この頃は社会構造の変化から伝統的な共同体や公私の関係が大きく変質した時期でもありました。

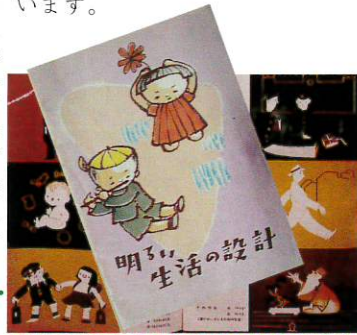


←内閣官房編『新国家公務員読本』です。マッカーサー元帥の書簡や米ソの公務員制度も参考資料として載せ、新しい国づくりに役立てようとしています。

→町内の青年会有志が発行した同人誌創刊号

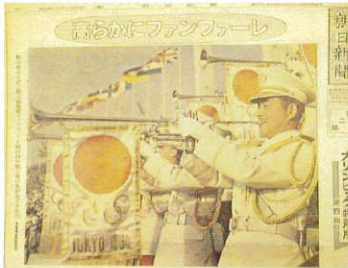


です。社会の変化に戸惑いを感じ、批判的な意見が多く載っています。



←生命保険のパンフレットです。1951年の統計では高校進学率43%、平均寿命は男性約61歳、女性約65歳でした。

第5セクション：東京オリンピック



←10月10日、さわやかな秋晴の下で第18回大会は開会しました。オリンピック関係の新聞記事には色刷りのものが多くみられます。

→決勝直後の女子バレーボール選手と胸上げされる監督。試合中のひたむきな姿勢と妙技、そして優勝という結果に日本中が湧き立ちました。



日本が復興した明確な象徴と目されるのは東京オリンピックです。これを機に東京は大きく姿を変え、道路・鉄道網の整備や人口集中が進みました。なお、アジア初の大会であり、参加国94、選手は5600人近くというのは当時史上最大の規模でした。外国の運動競技といえば野球や拳闘などわずかな種目しか知らなかった日本人にとって、ようやく普及しだしたテレビで見る様々な競技は驚きの連続でした。そのなかでも重量挙げで大会日本初の金メダル獲得や、男子体操・ボクシング・レスリングでの活躍、閉会前日の決勝で宿敵ソ連を破った女子バレーボール“東洋の魔女”は人々を熱狂させます。また「ウルトラC」という言葉もこの大会で広まりました。外国選手では陸上のヘイズが百m 10.0秒、水泳のショランダーは優勝4つ、フレーザーは自由形で驚異の三連覇、体操のチャスラフスカは女子初のウルトラCで総合優勝を飾ります。また柔道無差別級でヘイズが勝ったことで世界の競技になったことを印象づけられました。そして「走る哲人」アベベが近代オリンピック初のマラソン二連覇をなしとげたことも大きなニュースです。15日間の祭典は選手たちが国境を越えて手をつないだ閉会式で終わりました。



←レースの途中から独り旅を続けたアベベ。後に交通事故で下半身麻痺になりますが、パラリンピックで活躍しました。

第6セクション：地域紙のなかの

最後のコーナーでは、少し前の中野区と区政について地域紙からみていきましょう。

どこであれ地域に根ざした地域紙はあるものです。中野区域にも長く継続しているものがありますが、小館にはそのうちの一紙を収蔵しています。何度か名称が変わっていますので、それを追いつながりトピックをいくつかまとめてみました。



←1954年2月7日号「中野中央新聞」、収蔵する最も古いものです。ボロボロになってしまっています。

これが翌年5月27日号で「東京中野新聞」と名称を変えます。 →



↓同55年10月22日、今度は「中野中央新聞」になります。



←58年3月31日「中央新聞」と変更。この紙名は小館に収蔵する最終号の69年正月まで継続しています。



～いろいろな事がありました～

河川改修を求める運動
1955/8/6・1967/8/31



オリンピック聖火が中野を通過
1964/10/18

(左) 新図書館近く
着工 1962/9/28
(右) 区役所新庁舎
落成 1968/10/15



— 企画展の展示および展示資料に関するご注意 —

- 本展示では、資料保存のため展示替えを行います。第一回は8月20日、以降9月17日・10月22日に実施し、都合4種類の展示をご覧いただく予定です。原則として一度展示した資料は再び出ないことを予めご了承くださいませようお願いします。
- 同じく資料保存のため展示会場は照明を控えめにしております。やや見づらいとお感じになる場合もあるかもしれませんが、収蔵資料を末永く保存する上で必要な処置ですのでご理解ください。
- 特に詳しくご覧になりたい展示資料がございました場合は、小館古文書担当へご相談ください。

古文書つづり

年の計算「数え」か「満」か

昔、年の数え方が現在のよう「満」ではなく「数え」であったことはよく知られています。古文書担当にとっても知っていて当然の知識なのですが、つい忘れてしまうことがよくあります。

毎年恒例の古文書講座で、ある講師が使ったテキストのなかに「十三年以前」という表現がありました。現代語訳しますと「13年前に」ということになりましょうか。テキストは元文2(1737)年の史料でしたので、ここでいう13年以前とはいつのことか、ちょっと計算すれば簡単に答がだせませう。1737-13=1724。これは享保9年。

と、まあ極めて常識的で何のひねりもなさそうですが、実は間違いです。そう、満で計算してしまっているのです。数えの計算ではその年も1年としますので、元文2年が1年目、元文元年が2年目…となります。このように計算していきますと、正しい答は享保10年なのです。

まれに計算を合わせるため満を使わないといけない場合もありますが、たいていは数えの数値で考えていきます。

知っているつもりでも思わぬところで足をすくわれることがあるものですね。

享保9年、5代將軍綱吉に重用された僧隆光、画家の英一蝶、劇作家近松門左衛門が没した。翌年、徳川家重が江戸城西丸に移って世継の地位を固め、代官荻原乗秀に武蔵多摩・高麗の開墾が命ぜられ、新井白石が没した。

元文二年八月廿二日 年号を元文二年とし、
 元文二年八月廿二日 年号を元文二年とし、
 元文二年八月廿二日 年号を元文二年とし、
 元文二年八月廿二日 年号を元文二年とし、
 元文二年八月廿二日 年号を元文二年とし、
 元文二年八月廿二日 年号を元文二年とし、
 元文二年八月廿二日 年号を元文二年とし、
 元文二年八月廿二日 年号を元文二年とし、
 元文二年八月廿二日 年号を元文二年とし、
 元文二年八月廿二日 年号を元文二年とし、

▲テキスト冒頭。最初のところに「元文二年」と年号。本文5行目に「十三年以前」とある。

中野往来

鍋島家の墓所

本町2-26-6 成願寺墓域内

「中野長者の寺」として有名な成願寺には、中野在来の寺院で唯一、大名家の墓所があります。

肥前蓮池藩、四代藩主、鍋島直恒をはじめとする十数基の墓がそれです。蓮池鍋島家は、本家佐賀鍋島家の二代目信濃守勝茂の四男直澄が、寛永十六年に蓮池(佐賀市東部)の地、五万二千六百石を与えられ、分家したのが始まりです。

直恒は、三代直弥の子で、享保二年、十七歳で家督を継ぎました。供養碑の碑文によれば、直恒は、寛延二年(1749)十月十六日、麻布龍土町(港区)の藩邸で、病のため四十九歳で亡くなり、衾村(目黒区)に葬られました。それが後に成願寺に移されたものです。鍋島家と成願寺とは、寛文九年十一月に二代藩主直之の子、千熊が葬られ

て以来縁があり、この後も直恒の三男守尋、八代藩主直与の次男と三女、九代藩主直紀の八男が、葬られています。

また、別な場所に「鍋島地蔵」と呼ばれる地蔵姿の墓碑があります。正面に「真如院殿一幻妙覺童女之霊」「寔延宝二甲寅年十二月廿四日」と刻まれています。これは、佐賀藩鍋島家の子女の墓と伝えられており、立派なものです。



事業報告

各種事業経過

2000年10月～2001年3月

事業名	内 容	期 間
企 画 展	「収蔵資料品展『繊維の力』」	6/1～11/30
	「おひなさま展」	2/10～3/11
	「秋季所蔵名品展－堀江家の名画」	10/1～12/27
	「冬季所蔵名品展－浮世絵の競演」	1/9～3/31
古文書講座	入門コース 講師：太田尚宏氏（東京学芸大学講師）	10/7・14・28
文化財調査	青梅街道地区民俗調査	継続中
埋蔵文化財	弥生町六丁目3番民有地試掘調査（国庫補助対象事業）	9/27
	白鷺一丁目17番民有地試掘調査	10/20
	弥生町一丁目21番民有地試掘調査（国庫補助対象事業）	10/25
	上高田四丁目28番都有地試掘調査	1/25～1/27
	新井三丁目37番民有地試掘調査	2/7
	本町二丁目33番民有地試掘調査（国庫補助対象事業）	3/
	その他区内各地で立会い調査16件	

寄贈資料一覧

1999.11～2001.2
敬称略 受入順

資料名	点数	氏名
炭屋道具・刺子ほか	一式	飯塚善準
ポスター	1	ゲルト・ローゼンマン
非常食容器	1	区建設部
桃園第五尋常小図書	1	林 弘二
茶壺・練炭ほか	一式	飯塚善準
都電腕章・名札ほか	4	山本信乃
大正時代写真	約400	永江良一郎
図書	6	伊藤俊彦
蚊帳	1	田中和子
レコード	57	酒井光秋
ひな人形	一式	松田みよ子
かいば切りほか	3	深野金盛
オルガン	1	鈴木輝司
練炭コンロ・絵葉書ほか	一式	中村良雄
民謡録音テープほか	一式	磯田武市

五月人形	一式	みずのとう幼稚園
和人形着せ変え	一式	丸山
戸棚付本棚	1	湧井貞三
お櫃・奉公袋・下駄ほか	5	金子弥生
兜三段飾り	1	島峰麗子
もんぺ・防災頭巾ほか	一式	中村良雄
縮刷参考謡本	1	浮ヶ谷せつ子
竹製うちわ	1	矢島典雄
菓子販売用瓶	1	小西酒店
大正・昭和時代新聞	一式	窪寺克己
水彩画・デッサン	5	小杉瑪里
幻燈機ほか	一式	前田波津子
掛け軸	7	中野博善
茶釜・お櫃・せいろほか	一式	道廣
幌馬車模型	1	植木啓介
凧	一式	長谷川

◎貴重な資料をありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

入館状況

2000年9月～2001年2月（延142日間）（人）

一 般	社教団体	学校教育	合 計
10,582	481	1,791	12,854

発行年月日2001年4月1日

山崎記念
編集・発行  中野区立歴史民俗資料館

〒165-0022 東京都中野区江古田 4-3-4

☎ 03 (3319) 9221 FAX03 (3319) 9119

（印刷物登録番号 12中教社第13号）